林芙美子『戦線』「北岸部隊」を読む
―戦場のジェンダー、敗戦のジェンダー

菅　聡子

はじめに

あまり言及されることはないが、田辺聖子『ゆめはるか吉屋信子：秋灯机の上の幾山河』（朝日新聞社、1999）はすぐれた林芙美子論を含んでいる。従軍作家としての吉屋信子と林芙美子を比較しつつ、田辺は林の報告／報国文学の本質を次のように述べている。

> いま芙美子の二冊の従軍記を読むと、小説よりも芙美子の資質がよくわかって面白いところがある。運命的な軍令一下、遮二無二つき進んでゆく男の、野性的生命力に触れて芙美子は甘美な戦慄を感じている。野性の中の人間味に恍惚とし、男たちのエネルギイに陶酔する。芙美子は従軍記の体裁をとって〈兵隊〉と寝たのである。

〈戦場〉における林芙美子とは何者だったのだろうか。〈書くこと〉を通じて「〈兵隊〉と寝た」という林において、〈女性〉従軍作家であることそれ自体は、「従軍記」を書く／読むという関係性に何をもたらしたのか。本稿では、「林芙美子」という女性名によって発表された二つの戦争ルポ、『戦線』（朝日新聞社、1938.12）[1]「北岸部隊」（「婦人公論」1939.1）におけるジェンダー配置の考察をとおして、報国文学における〈書くこと〉の可能性、表象の力それ自体を前景化したい。

戦場のジェンダー配置

まず、報国文学の担い手としての林芙美子の位置を確認しておこう。林は本稿でとりあげる漢口従軍のほかに、一九四二年には「陸軍報道班員」として仏印・蘭印に正式な従軍として派遣され、加えて「一九三八年南京特派、一九四〇年北満洲視察、一九四一年満洲国境慰問など新聞社・雑誌社と特約した報道旅行を繰り返し、多くの前線ルポを書き残して」おり、「アジア太平洋戦争で最も活躍した女性従軍作家」であり「「言論報国」というジャンルの中でも、「報告報国」の第一人者」である[2]と言える。

林芙美子は、一九三八年九月一九日から一〇月二八日まで「ペン部隊」の一員として陸軍第六師団の漢口攻略に随行した。同じく陸軍に随行した久米正雄をはじめとする男性作家たちには無断で単独行動をとった林は、漢口陥落の際にはただ一人「一番乗り」を果たし[3]、一躍時の人となった。出発に際し、林は次のように語っていた。

> 是非ゆきたい、自費でもゆきたい、ならば暫く向ふに住みたいと願つて

ゐたところです、中支の生活が「動」の感じで興味があります、女が書かなければならないものが沢山あると思つてます、戦争について書いた優秀な文章に出遭ふと、現に私自身が打たれる―それが何よりの証拠で、もう今はくだらん恋愛なんか書いてゐるじだいぢやないと思ひます(「東京朝日新聞」1938.8.25)

「女が書かなければならないもの」を特権化する限りにおいて、ここでは、戦場での〈書く〉行為において、意識的に「女」という主体が立ち上げられていることがわかる。では、戦場で「女」であるとは何を意味するのだろうか。

「勿論、私は砲煙弾雨も怖いには怖いけれど…最前線は男の作家の人達がみんな行くだろう。私は、後方にいて、傷病兵を見舞いたい」[4] と記しているように、林が選んだ自らの立ち位置は「後方で傷病兵を見舞」うというものである。これは戦場における男性性／女性性のジェンダー配置、すなわち男性は兵士、女性は看護婦という配置に忠実な自己措定である。さらに林は、この二つの作品において、「私は御不浄へ行きたくなったので、皆にそこで待っていてもらって（中略）帰ってゆくと、沼田中尉は、女の人は中々大変ですねと云われた。全く大変な事なのだ。硝子のように、透明で何も食べない人間に、此戦場だけは生まれかわってみたいと思う」[5]「水筒の水を何度か飲みたいとおもいましたけれど…私は女ですから御不浄へ行きたくなる場合も考えなければなりません」[6]「度々私は御不浄へ行くことをあなたに書きますけれど、私は神様ではないのです。誰にも気づかれないように、今日も私は女の気苦労をしなければなりません」[7] といった類の叙述を繰り返している。このような生理的なリアルを挟み込みながら、身体的にも「女」を立ち上げていく。さらに行軍にあたっては、たとえば川を渡る際に、彼女だけは兵士に負ぶってもらわねばならないといった弱者としての「女」も前景化され、〈戦場〉における「女」のありようが明確にされている。それは同時に、「漢口の晩秋はなかなか美しい。街を日の丸や軍艦旗が行く。私は街を歩きながら、私一人が日本の女を代表して来たような、そんなにうずうずした誇りを感じた」という言挙げに収斂され、性的役割分担、生理的な「女の気苦労」、兵士に庇護される弱者、と複数の局面における「女」を表象することで、「日本の女」の「代表」としての自らを提示している。

このような「女」の視点が立ち上げられることによって対照的に強調されるのは、兵士たちの「男」である[8]。それは「雄々しい兵士の表情」「「男」の偉さ」「逞しく堂々としている」といった〈男性性〉を表象する語、さらにもう一つのキーワードである「素朴」といった言葉で語られている。〈戦場〉の当事者としての彼等は、「美しい」。そして〈戦場〉のいま・ここにおいて彼等を目撃する〈女性〉従軍作家は、「おかしい程、頬に涙が溢れてきて仕方がなかった」[9] との感傷をあらわにすることによって、〈銃後〉の女性である読者と〈戦場〉の女性である自身との紐帯を形成する。この点について、成田龍一は次のように指摘している。

…戦場において劣位の存在（＝非当事者＝非戦闘員＝女性）であるという意識が、優位の存在(＝当事者)に承認されようとする行為を生み出す。そして、その行為を通じて、非当事者をもまきこむ「われわれ」意識にもとづいた共同性がつくりあげられるのである。これはジェンダーをテコとしてつくられる共同性であり、ナショナリズムの喚起へとつながっていく。

「前線」と「銃後」を結ぶ感情の共同性が、「女性」というジェンダーにおける劣位の立場から形成されるという逆説。　（成田龍一『〈歴史〉はいかに語られるか―1930 年代「国民の物語」批判』日本放送出版協会、2001）

ここであらためて提起されるのは〈当事者性〉の問題である。すでにふれたように〈戦場〉の当事者が戦闘員、すなわち「兵隊」であるとするなら、それを〈書く〉という行為はどのような意味を持ちうるのか。火野葦平や大岡昇平のように自ら「兵隊」であった書き手と林が異なるのは言うまでもないが、一方、彼女は単なる偶然の目撃者とも異なる。内閣情報部の指示により詮衡された従軍作家である限り、林は「何をみるべきか」ということそれ自体を、あらかじめ規定されていたはずだからである。端的に言えば、日本軍がいかに弱々しくみすぼらしいかとか、日本兵の体格が劣っているとか、そのようなことを「目撃」すること自体がもともと想定されていないし、林自身もそのことを認識していただろう。そのような規制のもとにあって〈書くこと〉は何をもたらすのだろうか。

〈戦場〉におけるジェンダー配置において、林は自らを〈女性性〉を担うものとして規定していた。すなわち仕事においては「後方にいて、傷病兵を見舞」うという女性役割を分担し、身体性においても生理的な「女」を強調し、庇護される者としての位置を隠さない。この点において、彼女は〈戦場〉における自らを〈非当事者〉として表象しようとしていると言えるだろう。しかし実際のところ、彼女の真の仕事は〈書くこと〉であった。そして、この当事者／非当事者の峻別が不可能であることを、彼女の〈書く〉行為は晒していくことになる。よって、彼女の〈書く〉行為は、最終的には報国の枠組みに回収されつつも、おそらくは彼女自身の意図をこえて、〈戦場〉の真実を前景化してしまったのである。次節では、林の〈書く〉行為それ自体を追跡しながら、はからずも前景化された〈戦場〉の表象を見てみたい。

表象の（不）可能性―〈書くこと〉のゆらぎ

あらためて、『戦線』ならびに「北岸部隊」の構成を確認しておこう。単行本『戦線』は帰国後一ヶ月にあたる一九三八年一二月、朝日新聞社より刊行された。スタイルとしては書簡体で、戦地からの書簡（全二二信）に、「東京朝日新聞」に掲載された記事をまとめた「漢口戦従軍通信」「漢口より帰りて」からなる。「北岸部隊」は一九三九年一月、『婦人公論』に一括掲載されたもので、九月一九日から一〇月二八日までの日記形式で書かれている。掲載後、ただちに中央公論社から単行本

として刊行された。すなわち、「林芙美子はひとつの体験を二つの文体で報告し、ひとつの小説を書きあげた。日記体の『北岸部隊』と書翰体の『戦線』、そして小説『波涛』である」[10]。

だが、『戦線』「北岸部隊」の双方には、読者に林の〈書く〉行為を錯誤させる枠組みが仕掛けられている。その臨場感から、読者は林の〈書く〉行為の現場に立ち会っているかのような印象を受けるが、実際は違う。

この二つの作品には、しばしば林の〈書く〉行為そのものが書き込まれている。「北岸部隊」を例にとろう。たとえば、「夜、味岡少尉の自動車で朝日の支局へ行く。瑞昌行きの原稿を書いて渡すと、私はすぐ宿へ帰った」(九・二四)とある「原稿」は、「東京朝日新聞」九月三〇日に掲載された「漢口従軍ハガキ通信　一年の星霜」と対応している。すなわち、「北岸部隊」に見出される「原稿を書」くという際の「原稿」は「朝日新聞」に送るそれをさしており、それらのほとんどが実際の記事と照応している。また「私は日記をつけながら、日記を書く事に失望を感じ始めて来ている。何故だか解らない」(一〇・二一)というような「日記を書く」という叙述からは、読者はいま自分が読んでいるこの「北岸部隊」そのものを書いているような印象を受ける。すなわち、林の〈書く〉行為は公的には新聞記事を、私的には日記を書くことを指し、あたかも〈書く〉行為をめぐる二重化がなされているかのように見える。しかし、これは一種のフィクションである。

林は、この漢口従軍に際して、「一冊のノートを携行した」。

> 「漢口従軍日記」[11]として新宿歴史博物館が所蔵するそのノートは、布装、縦一八五ミリ、横一二〇ミリの中判のもので、そこに芙美子は日々の出来事を書き付けた。　(横山恵一「解説」『北岸部隊』中公文庫、2002)

『戦線』「北岸部隊」の二作は、〈内地〉に戻った林がこの「漢口従軍日記」に基づきながら書き上げたものなのである。すなわち、ここにおいて〈書く〉行為は三重化されている。読者の観点からは公／私の二重にみえるものは、さらにフィクションとしての「日記」「書簡」であるという外枠を有していたのである。とするなら、林にとっての〈書く〉行為の現場とはどこなのだろうか。限りなく〈戦場〉に近くありながら、しかしそこは〈戦場〉ではない。この時空のずれを伴う〈書く〉行為がその主体にもたらす変容は、森鷗外『舞姫』の顰みにならうまでもなく、『戦線』「北岸部隊」においても、文脈のノイズとして報告報国の叙述に亀裂をもたらしているように思われる。それは具体的には、「傷病兵」の表象のかたちで現れている。

> 瑞昌の町へ這入って野戦病院も見たが、病院と云うようなものではなく、傷病兵のひと達は、空家の中へむしろを敷いて、毛布にくるまって横になっているきりだ。繃帯ももう古くなっている兵がある。故郷へ左手で手紙を書いている兵隊もある。様々な傷病兵が、各家々に横たわっている。どの家にも蠅が炭の粉を撒いたように沢山飛びたっていた。

（「北岸部隊」九月二十四日）

九江の患者輸送船のように、ここにも色々な傷病兵がいた。馬に腹を蹴られて、腹を手術した兵隊、両眼を失って、白い眼帯をしている兵隊、そのほか、マラリヤだの脚気、呼吸器病と、さまざまの患者がいた。

（同、十月一八日）

これらの「報告」は、林が〈戦場〉におけるジェンダー配備に忠実に、「女」の役割、すなわち「後方にいて、傷病兵を見舞」うという、いわば看護婦に相当するジェンダー役割を選び取ったがゆえに、結果的に前景化されることになったものである。

さらに、報告報国の文脈に忠実であろうとしたがゆえに氾濫することになったのは、中国兵の死体の表象である。

ダウンと、何かに乗りあげては突き進んでいますが、此狭い路では、何度となくアジア号は支那兵の死体の上を乗り越えて行きました。

（『戦線』七信）

畑の中にはあっちにも支那兵の死体がごろごろしていた。なかには眼をあけているような死体もあった（中略）。此死体達は、犬よりもみじめな死にかたをしようとは夢にも思わなかっただろう（中略）。城内へ這入って行くと、軒なみに、支那兵の死体がごろごろしていた（中略）。此辺には往来の到る処、折りかさなった支那兵の死体ばかりだ。

（「北岸部隊」十月二十四日）

二作品の各所に散見される中国兵の死体の描写のなかに、次のような叙述が見出されるとき、それは何を示唆するのだろうか[12]。

何気なく覗いてみると、胸をぐちゃぐちゃにやられた支那兵が一人、呆んやり私の方を見ている。もう何の気力もなさそうだった。何と云うこともなく寒く身震いがして来る。誰かに似ている顔だった。おもいだせない。　（「北岸部隊」十月十九日）

私は此農家で、重傷して横わっている支那の正規兵を見ましたが、眼光はもう中心を失い、呆やりと戸口の方を見ていました。誰かの顔に似ていると思いましたが、私は走ってそこを去りました。　（『戦線』五信）

「誰かに似ている」、だが「おもいだせない」。林はここで自らの意識を抑圧し、これ以上の思考を停止している。同時代の読者においては保留せざるを得ないが、少なくともいま・ここの読者である私たちには、「誰かに似ている」というそれが中国兵と日本兵の相似である可能性を〈読む〉ことができる。荒井とみよは以下のように述べている。

この女従軍作家は、戦列の美しさだけを書いたのではない。進軍する町々の烈しい戦闘の直後に見た風景を書きとどめた。どこも死体でいっぱいだ。（中略）女としての、詩人としての、手放しの感傷が「民族」という枠の中の産物であることを強調するのである。そして読者は、日本の

兵隊の死体が一度も書かれていないことに気づくのだ。（荒井とみよ『中国戦線はどう描かれたか―従軍記を読む』岩波書店、2007）

たしかに、『戦線』「北岸部隊」においては、「梅村少尉の死」[13]という特権化されたいわば英雄の死以外は、日本兵の死体は描写されない。しかし、本当にそうだろうか。「ごろごろしてい」る中国兵の死体が、同時に日本兵の死体でもありうることを表象の力は明かしているのではないか。

林芙美子の〈書く〉コンテクストと、同時代の読者の〈読む〉コンテクストは一元化され、共通のものであった。それが戦時下の言語状況だからである。しかし、私たち現在の読者のいま・ここは、それとは異なっている。私たちが従軍記を〈読む〉意味は、不可視のものを可視とするところにある。翻って、それはまた林の〈書くこと〉によってもたらされたものでもある。〈書くこと〉と〈読むこと〉の交差のなかにおいてこそ、表象はその力を発揮するのである。

おわりに

佐藤卓己『言論統制　情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』（中公新書、2004）は、林芙美子が鈴木庫三から蒙った「筆禍」について言及している。林は、漢口従軍から一年余ののち、一九四〇年一月五日から二月二日まで北満州の視察に赴いている。「新女苑」の編集者・内山基の回想によれば、その際の見聞を記した「凍れる大地」（「新女苑」1940.4）が「掲載不許可」の「ゴム印」とともに「陸軍報道部」の「鈴木少佐」より突き返されてきたという。具体的な「掲載不許可」の内容について、内山は次のように記している。

わずかに憶えているのは、「満洲は悪魔の如く寒い」と書かれているのを、こんなことを書けば、満洲へ進出しようとする農村の人々の気持をはばむことになるのではないかというのでけずったこととか、その頃内閣が変って、大蔵大臣に三井の大番頭、池田成彬がなったのを、林さんは「何んともいえないホッとした気持で受け取った」と書いたのを、「池田なんていう自由主義経済の男が大蔵大臣になったのを喜ぶなどという表現はけしからん」というのでけずったことなどである。あまり馬鹿げているので強く印象に残ったのではないかと思う。
（内山基「新女苑挽歌（3）」『編集者の想い出』MODE et MODE 社、1983）

『戦線』「北岸部隊」での昂揚・感傷の口振りとは大きく異なり、「凍れる大地」の文章は暗鬱な調子に満ちている。林は繰り返し「息が出来ないほど寒かつた」「硝子が破れさうな寒さ」とその自然の厳しさに言及し、さらに、住宅の不備、文化的娯楽の欠如を指摘する。「満洲の土地は、あらゆる民族を蹴散らして残忍な、無限流露の地貌を現して」いると見た林は、「満洲へ来てゐる内地の都会人は、ほんたうの満洲と云ふ土地を識つて来てゐるのであらうか」と疑問を呈する。「満洲移民推進」を願い「満洲派遣前から林芙美子に協力していた」（『言論統制』）鈴木

からすれば、林の叙述は逆効果をもたらすものにほかならず、内容にクレームをつけたとしても不思議ではない。このような叙述のなかに、さらに次のような感慨がまぎれこんでいる。

> 疲れたせゐか、私は何時の間にか造花の飾つてある売場で呆やりつくりばなの美しさにみとれてゐた。―花のない都会、川のない都会に、私は昔の長春を呆やりなつかしく考へてゐる。新興の意気みなぎる大新京の街に来て、旅行者の私の眼には砂漠の街に来た感じがするのはどうした事であらうか、雄大な大理想のもとに計画されたこの都市新京に、一つの川もなければ運河もないと云ふことは仏を造つて眼を入れない感じがしないでもない。

漠然と暗示されたこの「新京」への違和感は、「凍れる大地」のここかしこに〈書くこと〉のたゆたいとして停滞をもたらしている。林がこの視察で真に〈見た〉ものは何だったのだろうか。紅野謙介『検閲と文学　1920年代の攻防』（河出ブックス、2009）は、「見聞きした事実を伝えること自体が取締りの対象となった」画期を関東大震災に際しての「朝鮮人虐殺に関する記事」の抹殺に見ている。報告報国がその任務であった〈女性〉従軍作家としての林芙美子が、〈書くこと〉を通して隠蔽さるべき「見聞きした事実」を晒してしまったとするなら、その〈書くこと〉に内在する亀裂を〈読むこと〉が現在の読者に託された課題であるに違いない。

戦後、林は復員兵を視点人物とする短編小説を数多く書いた。いわば、〈敗戦〉の当事者の視点を立ち上げることが林の戦後文学の一つの軸であったと言える。そしてその集大成が『浮雲』（1949）における富岡の表象であった。〈戦場〉においては非当事者性を身にまとい、〈敗戦〉においては当事者性を前景化する。ここには、林の文学それ自体と戦争をめぐる重要な結節点が存すると考えられる。この経緯において見られる言語操作については、別稿を期したい。

注

1）単行本は、全二二信の書簡（書き下ろし）と、「漢口従軍通信」（「漢口従軍記」九・二九～一〇・二七、「女われ一人・嬉涙で漢口入城・林芙美子記」一〇・三一、「漢口より帰りて（一）～（三）」一一・五、六、八「東京朝日新聞」）によって構成されている。

2）佐藤卓己「林芙美子の「報告報国」と朝日新聞の報道戦線」中公文庫『戦線』解説、2006）。

3）「ペン部隊の殊勲甲／芙美子さん　決死漢口入り」との見出しとともに「東京朝日新聞」（1938.10.29）に「従軍姿の林女史」の写真付きで報道された。

4）「北岸部隊」九・一九。

5）「北岸部隊」九・二五。

6）『戦線』一信。

7）『戦線』十六信。

8）荒井とみよ『中国戦線にはどう描かれたか　従軍記を読む』（岩波書店、2007）は「「男」という大状況は「女」が対するとき、もっとも雄々しく美しい姿を見せる。著者の意図は、行軍を共にすることで女性性を強調することだ」

と指摘している。

9)「北岸部隊」九・二四。

10)成田龍一『〈歴史〉はいかに語られるか—1930年代「国民の物語」批判』日本放送出版協会、2001。

11）磯貝英夫編『新潮日本文学アルバム34　林芙美子』(新潮社、1986)では「陣中日記」と称されている。

12）飯田祐子「従軍記を読む—林芙美子『戦線』『北岸部隊』」(『文学年報2　ポストコロニアルの地平』世織書房、2005)は次のように指摘している。「ここでもう一度、支那兵の描写に戻りたいが、その描写の細かさと量の多さは、従軍記に対する期待の範囲を超えているのではないかと思われる。(中略)敵の死体の描写、しかしそれについての意味づけがない大量の描写に、何を読んだらいいのだろうか。「本当の支那人の生活を知らない冷酷さが、こんなに、一人間の死体を「物体」にまで引きさげ得ているのではないかとも考えてみた」と芙美子は書いていた。他者に対する想像の欠落は、他者を「物体」化する。大量の死体の描写は、想像の欠落のすさまじさそのものの記録である。」

13)「北岸部隊」九月二九日の記述。「漢口戦従軍記　若き少尉の死」として「東京朝日新聞」(一〇月五日付)に掲載され、さらに『戦線』に収録された。

＊本文の引用は、『【伏字復元版】北岸部隊』(中公文庫、2002)『戦線』(中公文庫、2006)によった。

＊本文中、敬称は略した。

（お茶の水女子大学）

◇表現研究関係文献紹介

中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子編『表現と文体』(明治書院、平成17年3月刊、￥18,000)

本書は、表現と文体について、文学研究と語学研究との両面からアプローチすることを目指した論文集である。文体分析には表現理論が土台としてあり、それを文学作品を始めとする様々な日本語の文体研究に応用することができる。本書は論文集でありながら、そのような理論的考察を集めた章から各作品の個別的考察にいたるまで幅広い内容を扱っている。その章立ては、1ジャンルと文体、2表現分析の基礎、3文体分析の着眼点、4古典文学における文体論の実践、5近代文学における文体論の実践、6文学の表現、7日本語表現の諸相、8日本語表現の現在、9文体論のひろがり、10文献プロフィール、となっている。

ジャンルとしては、古典の物語・日記・随筆・詩歌から近代の小説・詩歌まで日本文学史の代表的な文学作品を中心としているが、その他に、舞台翻訳や漫才、講義や会話、さらには日記・手紙・携帯メールに至るまで、現代における日本語の様々な側面を対象にしている。日本語学の方法論としては、漢語・オノマトペ・方言・指示語・接続詞・文末表現・文字表記などをはじめとする基本的分野の他、談話・言語行動・若者ことば・差別語・ジェンダー・言語接触・日本語教育などをはじめとする応用分野、さらには視点・比喩・間接表現・テクスト論・読者論・メディア論などをはじめとする表現・修辞や伝達論にまで及んでいる。

（藤井俊博）